

# 被爆者の生き方

【ニューヨーク共同】新

井友尚】被爆から70年以上がたった2019年、ケロイドが発る姉の墓壇に恩をのんだ。「娘時代をおひいきしてきっこ(遺りてきっこ)」。広島で被爆した金本弘さん(79)=名古屋市=は核兵器禁止条約第2回締約国会議の傍聴を終えた1日、改めて姉に思いをはせた。「生き残っても尊別され、誰にも言えなかつた。被爆者の悔しさをどうか分かつて」。核廃絶へ歩みを続ける。

【一面に本記】

生後9ヶ月だった1945年8月6日、爆心地から

約2・5キロの当時の「斐駅(広島市西区)で原爆に遭つた。記憶はなく、後に状況を聞いた。家族の手につ

かまづ立ちした腰間、爆風に飛ばされて気を失つた。

近くの男性に逆ぎりで防火用水に出し入れられ、顔をひびいたかれて泣き出しあつた。

12歳上の姉千代子さんは学徒動員で爆心地から約1・5キロおり、大やけを負つた。「私は千代子よ」と言わなければ家族でも分からぬほど、顔は腫れ上がり、左半身にはケロイドが残つた。

米ニューヨークの国連本部前の集会でマイクを握り、核兵器廃絶を訴える金本弘さん=11月28日



者「命」(愛友会)に本格的に関わることになった。

親族の被爆体験を調べ、広島に暮らし続けた千代子さんの半生を知つた。

金本さんは大学卒業後に広島を離れ、名古屋の高校に音楽の教師として赴任。2013年に母が亡くなつた後、「愛知県原水爆被災

経験した。学校給食の調理の仕事への就職を希望しても被爆を理由に断られた。19年、がんで病床にいた千代子がこの間の難局を嘆いた。「おじさうじかつたか。もうとめしく接すればよあつた」。後悔が押寄せた。千代子さんはその年、86歳で亡くなった。再び被爆者をつぶさないと言つ金本さん。証言活動をする名古屋の高校などでは、若い世代に「想像力を働かせ、学び、行動してきっこ」と呼びかけていく。

締約国会議の期間中、国連本部前の集会でマイクを握り訴えた。「被爆者はおもしろが生きられない。生がいる間に核兵器を廃絶してきっこ。これが最大の願いじゃ」。